1951
2663

特46
77

緒言

神は極めて高潔なる處にはします。されば死を忌み給ひ病を悪み給ふ。然れども忌み給ふ故に之を救はんことを思ひ給ふ。悪み給ふ故に之を醫やさんことを思ひ給ふ。救ふ治醫高潔なる人と爲して生きながらにも神の如く崇め給ふ人と爲さんと思ひ給ひ、醫して以て我が前に詣でて歌ひ舞ひしつゝ賽り申しをも爲さんずる者と爲さんと思ひ給ふなり。

日露交戰の事起りてより、我邦人の之れが爲めに海陸軍人は元より其他の軍に關係あり、若しくは事業發展の爲め其國益を殖さんことの爲めに滿韓の地に渉り或は死し或は傷き或は病むに至れる者夫れ幾千万ぞや。然るに是等の人々は國家の爲めに彼の神も忌み人も恐るる死を睹けもの

38 11 22
閲了

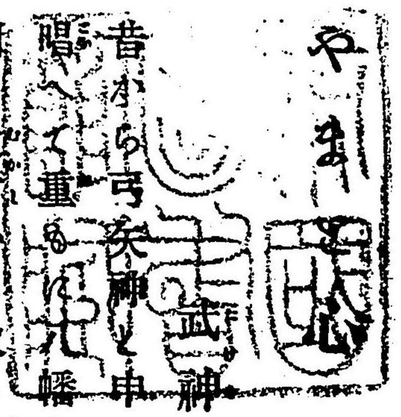
として彼土に至れるものなり。左れは其心元より高潔なり。此心は即ち神の納受して以て恩惠救助を下さんことを思ひ給ふ處なり。

神は上述の如く高潔にして恩惠を垂れ給ふ。而して國事に斃れ又は病み傷く者の心は上述の如く高潔にして惡德貪慾の念を離れたり。世の神職の如き神の御心を人に傳へ人の心を神に告け奉つる神人の間に立ちて紹介者たるの位地に在る者。豈亦た此の心を以て心として其職を盡くす所無からざる可けんや。

本誌は軍人及び軍務に關せる傷病者に對して之を熟讀せらるゝあらば些か其鬱勃の氣を慰むるに足らんかと之を印刷に附し送呈するものなり。

編者識

やまとごころ



武神軍神

昔から弓矢神と申し奉つるは、昔の武士が弓矢八幡などゝ唱へて重もに八幡宮を崇敬したので在つたが我が日本帝國の太古から取り調べたならばまたまた弓矢神として信仰す可き神は、數々有らうと思ふのである。昔では弓矢神と稱し今では軍神と申す可きものであつて、其中には我國の古き神樣もあれば、天皇樣の中にも坐しまし、又た人臣であつても、世の中や國家の事に就て、功勞あり道義を行ふて居られた人々の中にも、軍神として祭る可き方が有らうと思ふ。即ち極く古き時代にては、我が　帝室の初め神武天皇の御祖父世に天孫と申し奉る邇々伎の尊の、此の國に始めて御

降臨なりしときに、此の國土の事に大いに力を盡くして、人類に德を施こされし大國主の神即はち出雲の大社の主神で坐ます方が、其れ程の大いに力を盡されし此國土を遜々伎の尊に讓り獻上せられし折に、一人の御子事代主の神、是れは世に云ふ惠比須樣であるが此の方は父君と御同意で在つたが、今一人弟の御方健御名方の神は、中々利かぬ氣の方で在つたから、承知されなかつた處で官軍として即はち天孫邇々伎の尊の御先鋒として武御雷の神と經津主の神、是れは常陸の鹿嶋香取の神宮に祭られて在る神樣で有るが、是が談判にお出になつて、終に右の健御名方の神と腕力でもつて決鬪と云ふ場合になつた。然るにサスガ天孫の先鋒隊としてお出になつた神樣で在るだけあつて、其決鬪中武御雷の神は健御名方の神の手を取つて若葦の如く抓み

挫がれたと、古の歴史に在りて、健御名方は武御雷の手を取られたにも劍の刃の如く堅き氷の立たる如くで在つたとあるから、武御雷の神威の隆々たりしことが、之れにて知らるゝのである。是に於て健御名方も我を折られて、ソコは又た淡白な御性質と見ゑて、直ちに降伏して、父や兄の爲す所にも違はゞと誓言せられた。斯くなると此神も忠良なる神樣であつて、是が信濃の諏訪に今祭られて在ることであつて、今日日露戰爭にも、所謂天佑の方面に於て、神異靈現を現はされたことが在つたが、是は新聞にも出てあつて、其地方の人は見聞されて在るであらう、扨又右の健御名方神の異議が無つたから御兄事代主などは元より其心で在らせられたから、最早自身に於ても異存なしとあつて、其証言として手を拍て、其意を表されたとあるが、是が後々商人が手を拍てか

らは、其商賣に二言することの出來ぬ始まりであると云ふことで在るが、其れ斗りでもあるまい、後世武士が刀の刄と刄と打ち合せて、金打と云ふことをするのが武士に二言なしの証として在つたのも、右の趣旨の殘れる所であつたらうと思ふ。是は武士道に關係の有ることで、之を見ても我武士道の古來から源の遠いことも分るのである。右の事代主と申す御名の意も、言のしるしと云ふことで義俠にして一言の重きを守らせらるゝ、所謂武士氣象の御神で在るから、後世迄至りても「思はぬを思ふと言はゞ眞鳥住むウナデの森の神や知らさん」と云ふ歌が有りて、此神は事代主神を祭つて在ると云ふことである。以上述べたる所に依りて、後世劍客塚原卜傳又は馬術の大坪道禪などは、鹿嶋宮に祈りて、一流を開き始めたこともある。故に世に武御雷經津主の二神

は武神即ち軍神ともして在るのである。

右所述の武御雷と健御名方の決鬪の樣子がおもしろい、武御雷が大國主神と談判中、健御名方が出て來られて、其時千引石と唱へたる大勢で抱へても動かし易すからぬ石を、手の上に指し上げて、誰ぞや我國に來て忍び々々に物言ふぞ、イデヤ我と力競べせんと言はれたとあるが、此の出方などは、丸で古武士の趣きが、宛然として見ゆるのである。

次に日本武尊などは、昔名高かき水戸の義公、是は德川幕府が一家の政權を天下に振ひて、皇室の御勢はひは、微々たるものであつた時に、大日本史といへる大層なる歷史を編み立てられ、此費用として、領地三十五萬石の中を、五萬石とか七萬石とか之れに充てられ、天下の學者を召抱へられ、天下の奇蹟を探らせ、後々代々にも係りて取り調べられた程

のこと、今も猶ほ其殘部を、學者が調整して在る程のことであるが。此事が大いに天下の人の勤王心を呼び起し、之が後に明治維新の大業の成立を翼け上げたる効績の重もなる者であると云ふが、其水戸義公即はち徳川光國と申す方も、彼の日本武尊を以て、我國の軍神武神とし奉つる可き方と申されたとのこと。彼の尊の雄武よ坐しましたることは、少年にして遙々九州の果に下向ありて、大膽にも單身賊軍の營に入り、婦女の姿となりて、其賊の巨魁たる熊襲梟帥が處に於て、梟帥を刺殺し給ひしことは、少女の姿に眞似給ひしにて、其時代にては御身長も低く、優容に坐しましゝかと思はるゝに、之れに反して梟帥は、又彼れが揚言よ依るにも、彼れは頗る長大なる體軀なりしと思はるゝに、然るを尊は彼れを熟したる瓜の如くに、刺しながらに振り折き給ひしと

あるは、イカに雄偉の御方なりけん。彼の梟帥は兄弟二人なりしが彼は殺さるゝ時に揚言するには、我國の西方に於て、吾々二人を除くの外强き者なし、然るに尊の如き、吾々に勝さる御方も坐しましけりと云ふたとあり。而して尊は雄武の御行爲のみならで、智慮も遲ましかりしと見ゆ、容易の事にては敗れとなることを慮り給ひて先初め彼れの居地を窺ひ給へば、彼は三重に軍隊を備へて、其家を圍み護らしめたり。依て尊は彼れが居宅の新築の祝宴を張るの日を待て、是の日にぞ多くの陪侍せる女子の中よ、女裝して紛れ込み給ひたるが、梟帥は其容色に見惚れて油斷せし隙に、其懷なる短刀を出して、直ちに彼の衣襟を執らへて、其の胸を刺し、續きて其弟が逃んとするを追ふて、其背を執らへ、劍を肛門の方より突き通されたりとなり。是時の尊の宣言も堂々

として、威儀あり。其れは彼等に向つて、吾は卷向の日代の宮（當時の帝都）に坐まして大日本を統治し給ふ大足らし日子於斯呂別の天皇の皇子名は倭男具那王であると宣り聞かせられた。是等は兵道の上から見ても、奇を以て勝を制し、正を以て戰勝の大事を宣言し給ふ所であつて實に尊信し奉つる可き所である。惣て此の時の尊の御擧動は、前後正々として、而も策に遺算無く而も機敏に在りて、畏こけれど今日對露の戰事に於る、我國の態度が似通ふて在るのである。此後猶も尊は東國を征伐して、近江の伊吹山にては、惡神を平らげ、駿河の燒津にては、野原の中に殆んど燒殺されんとし、相模の走水に於ては、難風の爲に御妃の橘姫は、御身代りとして海中に投死し給ひたるなど、多くの苦辛を經て、我國の爲に大功を成し給ひたるが、此日本武尊の御上は、天に對

しては人道の經營、父天皇に對しては、之が御事務に代れる孝道而かも國家の爲、後世に永く國家の經綸と爲る可き、經營の在る所を遺し給ひたれば、亦文武二途にして一致たる の御神として、齋祀す可き御方で在るのであらう。

軍神の話も同ドことにて讀者も或は之に讀み倦れん故に、此れ位にして筆を止め置かんと思へども、猶世人の注意を呼はんと欲するが爲に、今少しく述んに。即ち八幡大神の御母神功皇后なども、軍神として祀る可きことであらうと思ふ。其れは彼の三韓攻伐の事が、雄武なるは無論で、是よりの後上古彼國に於ける我國の經營上に就て、其の根基端緒を遺し給へるは、文治上にも御功績ありと謂ふ可く。八幡大神は是故かして、世には武神よりも文德の神であると言ふた人もあつた。其れは彼の八幡大神が、御母の胎中に在りて、未

た世に生出し給はざるに、而かも御母子健全に征韓の事を畢へて御歸國に爲りたる事と此大神の母胎中に健在なりしは、大いなる健康の御體質にてありしならんと推察し奉らるゝとに証して、此の神も亦武神と齋祀され給ふ理ならんと思ふ所なるが、武と云ふても必らずしも戰爭斗りでない。其れは武の字は戈を止むると云ふ意で出來て、止戈の二字が武の字と爲つたのである如く、世に謂はゆる拔かぬ太刀の功名とて、敵を迎へて手合せをせぬ中に早く敵を威伏し、又た敵の思はぬ所に出で勝つ、是れは平和の仕方でも、此の方が心膽を落ち付て爲し掛れば、敵も却て其思はぬ所に出でられて、ドウさるゝのかと狼狽することも在るからである。昔し孫子が善く戰ふものを評して、不敗の地に立つと云ふたが、此意味で在つて、我先づ敗れざる計の根據を成し

て、鬪爭を爲すのであるから、既に戰の手合せをせぬ前から、勝つ可き筈に其筋道が爲つて在ると云ふわけで在る。今日の時局に於ても、我が國では開戰の前から、平和を以て敵國にも交渉し、他の外國にも交渉の有る事が在つて、而して後に止むを得ず兵を起したので在るから。作戰計畫なども、敵より先きゝ早く出來て、毎事此方が用意の出來て在る所に、敵が來るので在るから、常に我は勝つ次第である、之をも武德と謂ふ、故に此の旨を以てすれば、八幡大神は、右所述の武德上よりして、軍神と尊信す可きことであらうが、昔の學者も論ずたる如く、此大神即はち應神帝の時に、支那の千字文や、彼れの倫理學の重要書籍たる論語の書は、韓國の百濟國より、而も王仁と云へる賢哲の學者と與に、我國に貢獻した如きは、我國文學の開始とも謂ふ可き次第で在つたから此

神を文德の神で在らうとも云ふた。惣ト て我國の文學は武事と相伴なふて行はる故に、其一致の大効用を爲したことであつたが、後世官上の人は文弱で下なる人は武愚で在つた時には、我國力も外に十分の發達も出來無つたのである。然れば神后と應神帝との御間の事は、文武の圖謀自のづから一致に坐したりとは、畏こけれど想像さるゝことなるが。實に神后の御武略などは、當時御征服の地は、今の遼東迄に及びて在りたることは、先年對清開戰の役に、其の事の記して在りたる漢文の石碑が、彼地に存在して有つたことが、其の時の人が認め得たことで、其比の新聞紙にも載せて在つたので在る、我古史に記せる所でも、韓國や支那の書籍に在りと聞ゆる所でも、此時の皇師が韓國に入るや、順風大に起りて、其船舶を行り、其の餘勢の然らしむる所、波瀾大い

に動きて、彼れの新羅の半國迄に浸したるが、此新羅の地は、今の朝鮮の半土の邊りであるやうで在る且つ海中なる大小の魚が、皆な御船を負ふて渡つたとの說も古史に在る。故に支那の史上にては、神后の事を記して、幻術妖術でも使はれたる如く言ふたのも在ると聞く。右の事實は即はち今日で言ふ所の天佑でも有うが又た以て神后の御武威と、胎中天皇と稱し奉つる御胎內の子應神帝の御德の相因る所で在つたらう。然らは則はち神后も亦た御子八幡大神たる應神帝と、同ドき軍神として齋祀するを得可きで在らう。八幡大神の事は、筑前の筥崎宮に鎭坐して、今日戰局の上に神護を垂れ給ひ、神功皇后は、同國香椎の宮に祭られ給ふ所にして、此地は夫帝仲哀天皇が、九州の熊襲を伐ち給ふより、後の神后の征韓に及んでも、大本營であつた所である。

マタ中世に至りて、我國の東夷を征服したる、坂の上の田村麻呂などは、其武器と云ひ平生の行なひにしても、笑ふときは小兒も狎れ近づき怒るときは鬼神も恐れ避つ可き程の勇威有りしとのことで、勇猛斗りで無く、其智慮も在る可く推量さるゝ所の武德有る方と思はるゝことであるから、是亦軍神とす可きであらう。現に今も西京の東山に、將軍塚と云ふがありて、是は甲冑を着した武人の人形を埋めて、京城の鎭護神と祝ひ收めて在るのであるとのことで在るが、或は傳說する所にては、是が右の坂上田村麻呂であるとも云ふ。然るときは何に致せ田村麻呂と云ふ方は、武人にても世の敬信する所が重かつたと見ゆる。其れからマダ々々是等の人々を調べ立たならば、記す可き者も有うが、武家時代に至りて楠公正成などは、忠死の方斗りで、他の行爲を世に知

られ無い所が在るが、其平生の行の私慾の無き所から、政治の深く行き届きたる所などの事實が在つて、我邦古今珍らしい方である、昔の或る學者などは、支那で言ふ聖人と云ふ完全な人が世に在るならば、正成などは其人で在うと論した人も在つた。イカにも楠家が代々國家の爲めに盡し、其親族臣民迄も、楠家の爲めに死力を盡くしたのは、楠公が忠死せられたに感ずたのみでは無からう、其政治の爲方が、公明正大に行届いて在つた德の力で在つたらう。凡そ人は、平素は物和らかにして、腹に十分の强みを蓄はへ、而して大事の破るゝに至るや、決然として起ち、機敏に活動して、道理に據りて飽迄勇進事を成し、勝を制する如き、之を武德有る者と謂ふ。然らば正成は其れである、又足利時代戰國の時よ名高い、彼川中島で武田信玄と雄を爭ふた、上杉謙信なども、軍神

と爲す可き方であらうが、謙信十七歳にして、越後の大國を切り從がへて自國の亂を治め、友邦村上義淸の爲には武田と戰ひ、舊主家の上杉憲政の爲めには、北條と爭ひ、父の仇を復するよは、越中の地を討ち、敵を四隣に受けたる中にも、上京しては天子將軍に伺候し、義は敵たる武田の使用に窮せる所の鹽を送るなどの擧有り、勇は僅かに八千の兵を以て、其身は甲冑をも着せず、手に靑竹の如意を持して、諸邦に横行したるなど、當時稀なる方である。今別格官幣社上杉神社として祭られて在るも、偶然の事では有るまいと思ふのである。

義軍は神の心を體す

神の德は廣大なり、恰かも心廣き父母が、子を叱るに當りては、頗ぶる嚴なれども、之を宥免するに至りては、又之を愛することの、人よりは一層深き者有るが如く、神は人の過ちを咎め給へども、其人が其過まちを改悔して祈り申せば、又之を免し給ふ。然るに其罪し給ふにも、種々の爲され方有るなり。其は神の御心の廣き所より、其罪の輕重を計りて、或は其人の一身に於ては、其罪の輕きも、爲めに人に及ぼす所の重き者有るとか、又たは重きが如きも、熟察すれば、輕きに歸する者も有る如き、又たは得可くんば、其の人が自から省みて、改悟せんことを待せらるゝことも有りて、其罪し給ふにも、緩急遲速の程度有りて、常人の眼より見れば、罪も報ひも無き者の如くに、時よ間ダルク思はるゝことも有る可けれども、其罪報の及ぶ處、的面に其人に來るも有り、子孫に至りて至るも有り、或は意外の点より、其人は其故とは知らずして、不幸を招くことも有る可し。神の心、然く廣大なるが故に、

我々が以上述ふる所も、人間の小量から推測したる所なれども、其事例は古來隨分共に在りしことなれ、其れに依りて他に推量し至ることをも得らるる可し。此の廣大なる神の心は、公明なる御德なれば、其普事に及ぶも同し如く、而して之れが罪咎を免恕し給ふに當りては、又前過を思ひ給はざる者と、畏こけれど推量さるゝなり。

然れば國と國との戰の如きも、敵國が飽迄非理の强情を張るに至りて、我は義軍を起して彼れを討ち、力の限り彼れを膺ち懲らす可きも、若し敵國が其過まちを悔るて、和を講ずるに至れば、我亦た之と和し、元々の如く交際して、以て互の利益を保有す可きことなり。斯くなりては案外後に至りて、互に親密の間柄と爲りて、却つては互に患難を助け合ふに至ることと有らんも知る可らず。此は其初め講和の時に、互ゐ

信實を以て交はりを定なるに依るなり。然るに然は無くて、敵國たる者が、傲然たる心を持し、而も我を胡魔化すの手段を用ゐるなどの如き事あらば、一旦和すると雖ども後に至り又もや平和破れて、更らに交際上に、種々の面倒を起し、戰爭再び起るに至らば、以前の辛苦を和樂に復することは能はずして、辛苦に辛苦を重ぬるに至る可し。然れば世界の事變は何れの處に現出するや、豫かゞめ容易に知り難き者なれば、以上述る如き、講和の場合に及んでも、豫かゞめ後々萬一の事變を慮ばかりて、用心油斷有る可らざる者なり。是我たる國民は神の御心を心として、其敵を罪して討つ可きには討ち宥免す可きには宥免する公明正大の理に基づく者たり、然るに其後の謀をなすにも、我は猶ほ人道を保護するが爲に、萬一の事變の爲に十分の備を爲し、其れに就ては猶

戰勝に安心せずして、身を約めて、財を蓄へ、生産を增殖し、教育の道を發達せしめて、人たるの務を子孫にも勵行せしめる等の務を忘る可らず。是亦神の御心に隨ふなり。戰爭の如き、人を殺し財を損するは、神の好ませ給ふ所ならざるも、我の人道を保護するに務むるは、神の道なるに、之に仇なす國有りて、事變を起すあらば、我義軍を起して、之と戰ふの準備を爲さんこと神の心に背く者には非ず。我は我が道を守り、我力を養なひ、今日の事を思ふては、後の患難を慮はかり、薪に臥し膽を嘗て、患苦に耐るの慣習を成さんこと、却て此の後の計に非ざるか、八々宜しく思ふ可き所ならずや。

むすびの神恩

松田敏足

一体吾輩は本トウ御幣荷デス世間デハ隨分表面生業的に御幣を荷ぐ者も有るが吾輩はソンナ流金的の者で無く眞、

底精神有難く思つて御幣を荷ぐのだから今日の風潮に以て行くと隨分困つた嫗嫁々に迂かけた迷信だと云たらうが吾輩にも腦髓に獨立自主の良心は居つてをるから眞理と非理との差別の出來ぬ事は無いソコデ躍起一番斯道の講話をやるのダガ先づ劈頭に誦上るは彼北畠親房公の元々集に云「昔シ混沌未ダ分レズ唯元氣有り云云其中ニ精有り之ヲ神ト云能ク萬物ニ祖宗トシテ兩儀ヲ主宰ル」と有るが兩儀とは謂ゆる大陽と月輪で實に此混沌未分の中に始も無く終も無く鎭りますが彼產靈の天神にて是が則チ世界萬物の祖宗我日本の天皇陛下は此祖宗產靈天神の御正統の天孫で其レダカラ日本を特別神國と云フダガ實に其產靈の神德と云物は剛氣な物で大陽月球の兩儀を主宰させらるゝは固より世界中有とある幾億萬の星までもソッ

と御懐に入れさせらるゝと云洪大無邊な者で此地球なども手の腹の内の玉と云たいが實は比較上モソット細い物で其玉のめぐりにまぢり付てる塵垢が吾輩人類其他と云者ソコで諸君考へて御覽例之は今香物の壓石を八重なんはで釣上げて其下に頭顱さし出すさへ隨分いやナ氣持のする物さるを此地球でもザッと直徑が一万里もある其から土曜星ダノ木曜星ダノ大陽なども此地球より百三十万倍も大きいと云洪大な物が此大空にぶら下がり吾々の頭顱の上を舞廻つて居るのダ夫が孛繩一ト筋かくるでも無く唯引力と云て造化の神の力で開闢以來百千万年今日に至り位置を定め一點の異亂無く春夏秋冬夜晝をなし五穀が出來綿ができ桑ができ吾々人間が寒く無く飢るく無く生活する基が立て往く事デス

但し是位の話は今日では小學校の兒童でも知テル事で反復く云のは野暮な樣ダガ夫でも日本人は近來天地神明の事を怪物はなしでもする樣に云風潮となつて報本の道が譯が分らぬ樣否報本どころか丸で神は無き物とする無神者流が續々殖てくるさては天地の元に神と云が有て萬物の支配するなど云事はソリヤぐつと開けぬ野蠻的時代な幼稚な咄と口も明せぬと云樣ダガ其文明の本家本元といふ西洋の碩學が決して無神説は立ぬ彼澳多利のスタイン氏の説にも純正學的ヒコールヒロソヒーは有神説なり自然學的ナチユールアスナツヒックは謂ゆる無神説なり此二説有りと云へども其極點に到つては靈妙不測にして窮め盡す能はず到底造化主宰の妙用と云より外無かるべし」とあるノダ彼かれこれの物に記して有る希臘の古聖人速

刺哲の昔はなし夫は彼速氏が或時一人の諸生を引つれ其國の都會の市街を徜徉と散歩して居る所が此諸生は何がさて田舎そだちの物珍らしく彼所此方の店先に並べたる商ひ物に氣を取られ殆ど足許の牛の糞にすべるも覺ぬ程で有た時に或店に玉を彫刻した偶人か一ッかざつて有るに目を付け無症にながめ入りソット速氏の袖を引かへナント先生ナヨト御覽アノ偶人の鼻峽口許ホントー物を云ひソーな顏容實に上手な感心な手際ダと詠入て居る速氏はシロリと睨みナンダ大造な感信の爲樣ダガ上手と云て名を呼は直樣返辭をし手招きすれは歩みかけてデモ來るのカイと謂ふに諸生は不承知な顏付で固より玉細工の土偶人形ドーシてソンナコがならうゾと冷笑つて居る所で速氏は振返つてソレでは若し爰に呼べは直返辭をし麾け

ば直歩みかけて來ると云細工でもしタラドーダ上手と賞るかいと云へは諸生は答へてソンナ細工が有れば此上無しの上手ダカ廣い世界にもヨモヤソンナは有マス・マイと空嘯ひて笑て居るに速氏屹度諸生に向ひナンダ是學問をするも吾身の根本性命の大原を知るが第一肝要の事で有る。さるを汝は彼玉細工をばかり感心してナゼ此市街の吾人人間を感信爲ナイヅヤ而も人とも云はず吾身體をナンと思つてる是則ち謂ゆる多くの元素の分子を埴たて丶製た土偶人形に相違は無い夫がサテ名を呼は返辭をし手麾すれは歩みかけて來る所か鎌を取り筆を取り自由自在の活動するといふモノ此造化の奇妙不思議の上手な細工無量無邊の有難き賜物よは氣が付ずトット感心爲ないで彼僅な玉細工に感心して眺め入るとはユライ遲蒔な話ダハ

と一本やられて彼諸生頭顱を搔てトット閉口の体で有た
と云ㄱ
さて此通りで必竟人間とて別な理屈は無い全たく彼數十
元素を埴立た木偶人形夫がサテ返辞したり歩行たりは愚
鍬をとり槌をとり箭を取り針をとり開拓とか製造とか堀
るとか鑄るとか織るやら縫ふやら種々薩埵の事をなし奇
々妙々の現象をあらはすのも又みな産靈の妙巧造化の細
工に出る者でスさては古へに今に聖賢とか命世とか英雄
とか豪傑とか小理屈をひねぐり已溺天狗となり大僧正坊
となり開化とか革命とかヨモ知れぬ法螺を吹き天上天下
唯我獨尊と喜摩刺亞大の鼻うごめかすも皆此木偶作の所
爲ゑて必竟木偶作の内の小智慧の有るのを大閣とか奈勃
翁とか孔子とか釋迦とか韓圖とか斯邊瑣とか小奇麗なの

を小町とか楊貴妃とか名を付て神祇釋教戀とか色とか無
常とか結局前から小木偶をほちくり出し社會繼續或は喜
び或は怒り泣やら笑ふやら森羅萬象種々様々奇妙奇天烈
造化無盡藏の現象を發し到る事である是等の理から推す
時には御幣を荷ぐのは日本のみの事で無く文明の國が文
明ほど餘計に御幣を荷ぐ筈で實ば昔から神國といはれた
日本など實に御幣のかつぎ様がまだ中々比較的足らぬと
云物で在る
さて以上は世界一般普通に付ての神の御恩の咄ダが就中
日本は昔から神國と云れた丈で他の國とり神恩が一倍も
十倍も深いのダソリヤ吾輩が世間知らずの口で云のぞや
無い外國人でもそー云て居る彼日爾曼人檢夫爾氏の書た
物にも日本は殊更神の偏愛に恩寵を下さつたる國ダと云

て居るが間違無い咄で實に上等の國と云者また佛人シアングラセ氏の詞と云にも「婦人衣服の華美なるは日本に及ぶ者他にある事無し其絹の糸の細かにして良美なるや衣服を十襲二十襲よせし者常に多く有るヿなり是日本絹の精良薄緻なる容易く數疋の絹を懷中に收めらるゝを知らざる者は此言を信せざるべし」と云ひまた風土氣候の事を云て「若し住民の健康を以て一國中の空氣の清良を徵み知るべしとせは日本は地球上第一等と云も決して過たる賞に非ず其國病痾常にすくなく人々長壽をたもつが故なり夏の時氣候炎熱なりと云へども周圍に滄海あると數條の大河國中に流るゝが故に自から冷涼を調和す土地膏腹にして一歳兩度米と麥との收穫あり是山岳雪を降す事多く灌漑を助くるに因る者なり」と記して居る

マア斯云風で日本は實に小國だけれど比較的に山高く谷深く森林茂く水流が尤も行き足らひて土地の肥饒を助くると云ので實に産物で全國が充されて居る彼維新の前後彌よ交際が開け万國が寄一方で日本一國に取かゝつて交易にれしよすると云ので夫コソ日本は見る間に金銀悉く吸上られ貧血症の骨と皮になり軍も爲ないで忽ち自滅して南無阿彌陀佛ダと恐れ入て居たのがソコが有難い者で土地は肥てる産物は潤澤人智は機敏器用と云物デスから交易始まつて製作工業器械の開けるが否やソレコソ打出の小槌の功能見た樣に山からも海からも野からも地の底からも湧出した産物製物米倉所の咄でない見る間に輸入を壓倒する勢ひとなつた一寸明治廿年度の農商務省の報告よ由て御咄するにも其年の輸出品一番高の太いが先第

一が蠶糸類次が茶其次が石炭夫から米。陶物類。生銅。熟銅。樟腦。するめ。マッチ。漆器などが先主要たる者さて第一の金高が絹糸類で熨斗糸屑糸まで〻貳千貳百四十九萬七千圓餘第二が茶で七百六十萬圓餘夫から石炭。米。陶器。銅。樟腦。鰯。などが皆百萬圓以上で總計輸出品金額五千貳百四十萬圓餘と云で有た處に其年の輸入價額が四千四百三十萬圓餘と云者でシタから差引輸出額の超過たのが金八百拾萬圓と云物マア我國の産物の饒かな事と云たら此通彼戰爭前後の輸入の烈しき時は別もものダガ常式で行く年は何も斯云割合幾んど貳割近い輸出超過を見ると云者ナント金銀吸上げられて自滅する事と往生して居たのが彼方此方に吸上ぐる勢ひと成たも全たく日本は神國で天地神明の恩賴の勝れたるに由る事で有るマア然云より外に云樣は有り

は爲ナイで有ラー

抑も神とは天地の心世界の魂で有る佛經に三界唯一心心外無別法」とて心の外別の法なし心が則ち神であるされば八百萬の神とは天地間風とか火とか雨とか穀物とか人とか土とか一切の靈魂是を八百萬の神と云のヂヤソコで一体此八百萬の神の贊成が無くしては五穀の豐作も雨風の潤ひも戰爭の勝負も國家の太平も中々順能く往かぬ道理抑も我國の天皇は神代の初め瓊々杵尊が降臨の時に祖宗神漏伎神漏美尊が彼八百萬の神々を神會へ會へ神議はかりて皇孫瓊々杵尊を君主と依し國土を治めさするのは贊成なりや否やと訪ましゝ時滿場一致贊成を表して治めす我歷代の天皇にましますされば風の神も雨の神も火の神も贊成を表した天皇陛下さては其御軍の鋒先の鋭からぬ

道理は無い」昔神武天皇が大和の國御征伐に大陽を脊に負て御軍有て直ちに敵を平らげに相成たされば此節東郷大將の日本海大海戰も神武天皇の昔を學び奉り大陽を脊に負ひ敵を討て彼波爾逐艦隊を靈にしてシマッタと云事ナント神々の御威は大變な者で風にも火にも御魂が籠つて助くると云者ダカラ一々命中する道理だ其代りまた神の命に反いタラ忽ち神武天皇は始め大陽ゑ立向ひて軍爲ましタデ御兄嚴瀬尊敵の痛矢串に中りて薨りまし仲哀天皇も神の詔を聽まさずして即日に崩御ましくたる由國史ゑ記して有る天津日嗣知しめす天皇でさへ此通りダカラ苟しく神の御國に生れながら神の御命に毫末ほどもそむくべき事かは天晴神洲の益良夫とあらば朝な夕なに神と皇との詔命のまにく精かぎり根かぎり盡すべき事ヂヤ

サテ云たき事は山々ダカ土壇御幣かつぎの荷ぎはなし產靈の御蔭咄も古い物だと山鳥の尾の長々しくやつたら足引に痺が入るダラー先は此邊で止め置く」とするノダ

運命の話

織田圓

運は天に在り、餡餅は棚に在りとは、多く世の人の口にする處なるが、只其幸運を天に任かせて、相待つのみにては、決して幸運を得る者ではない。餡餅は棚ゑ在りとも、是を得るの方便を講せねば、決して口に容るべき筈がない。人間に運命と云ふ事の最も必要なるは、余輩が言ふ迄もなきことなるが、此の運命の幸ちを得るには、第一其の運の在るべき天の心に叶ふ樣に、吾人平生誠の心を以て推盡くし、天德に從ふ樣にせなければならぬ。日露の事起りてよりは、何れの神社

に於ても、出征諸兵士の武運長久を祈られつゝあるが、前にも言ふ如く、人は實に平生の心掛が第一である。例へば爰に人有り、俄かに神社に頻繁に參拜し、其の子の出征せざらむ事を祈るとせん歟、或は災厄に罹らんとして、足繁くも社頭に參詣し祈願爲したるに、其の功驗もなく、遂ひに其の災難を免るゝ克ず、或は其の事の成就せざりしの時は嘆息して曰く、嗟乎、々々天も神も有る物でないと、然るに是れ等の者の平生は如何にと云ふに國家民人の本たる神社の事なぞは、髮の毛程も心、頭に留めず、然かも其の產土神社の前を往來するも、鉢卷を取除ず、拔きたる肩を容るゝでもなく、拜揖でもなく、冷然甚だ不敬なものも在るので有るが、已れの要求事叶はぬとて、今更の如く不足を云ふは、實に我儘勝手と云はなければならぬ。其は人間に於ても正に然りで、平素は

途上にて遇ふても何等の會釋もせず、横平冷淡の素振りある者が、たまたま身に罹る大事件を出來し、詮方なくも、忽ち阿諛令言を呈し、低頭平身種々の品物を持來りて、其の事を依頼するとせんか、余輩は快く承引すべきや、否や、情實等に對し全然拒絶する譯には行くまいが、是等の者の爲め、精、心的の盡力は出來ざるべし。天に於けるも亦た神に於けるも、理に於て異る事はないので有らう故に天運の然らしむる處は、如何なる英雄豪傑も及ばぬことで在つて天の冥助を得ずして武運に拙く、一度其咎めを蒙れば英傑も敗亡救ふに術なきことで有る』

爰に一例を擧んに、昔豐臣秀吉が、主君織田信長の仇、明智光秀を討亡ぼしたるに、秀吉を憎める織田の舊臣等が、秀吉を亡ぼさんと爲した、其時秀吉は敵となられたる、織田信孝と

戰はんが爲に、美濃の國へ出張に及んだ。(主人の子たる信孝と戰ふなどは、人道に於て好ましからぬことではあるが、此の時は主の仇たる明智を討つた力は重もに秀吉に在つたので在るから、其秀吉を信孝が討んとせらるゝのは、時機ではない、故に秀吉も正當防禦に出たので在ると言はねばならぬ)。然るに此の時信孝の味方たる、柴田勝家は北國より討つて出て、秀吉を挾み擊ちに爲さんとしたが、此が秀吉の天運に叶ひし所にて、美濃の呂久川が大雨で洪水が出で、軍を渡すこと出來無つた爲に、直ちに引返して柴田に向ひ、遂に大勝利を得た。此時若し秀吉が川を渡つた後に、此洪水が有つたらは、秀吉は引返すことも出來ずして、信孝の爲めにも打敗ぶられたでも有うが、誠に運の強いことで在つた。後に至りては兎も角も、此時では秀吉は信長の嫡孫信秀を推立

て、皇室のまします京都の治まりをも計りて居たので在るから、天佑の有りたのであらう。然るに其子秀頼の代に至りて、脆くも其家も亡びたるは、秀吉が天下に權を專らにするやうに勢ほひを得るに至りては、隨分道に叶はぬ行なひも在つたから、彼の草履取りより起つて關白に迄もなつた、英雄でありながら、後には天運も他の家に至りたのであらう。今や吾が國は露國と戰ふて、毎に勝たざること無きは、是れ上陛下の御稜威と忠勇なる陸海軍人、且つ惣ての國民の奮發に、天佑も神助も有らせらるゝ故にして、道有り義有る所天運の叶ふ所以である。因て思ふに我國民たる人は、國家と神社と人道忠孝の在る所とを相離れず、誠を以て近き産土神より敬禮して、其生れたる土地を愛するの心を以て、弘く國を愛し、其産土神を敬信するの心は皇祖皇宗の御神

を忘れ奉つらむ、此心が即はち現世の君に忠に親に孝なるに在りて、又た即はち天運に叶ふ所以となるのである。

編者云本話秀吉の事に係れると、其他文面にも原文と異なる處有れども、其は只意味の通ずるを要するが爲にして、敢て私に左右するに非ず、述者に對して諒恕を乞ふのみ。

○葦原國歌

後宇多天皇

天つ神國つ社をいはひてぞ我があしはらの國は治まる

左中將基綱

天地の神のかためし御國とて犯しはてたる夷をも見ず

紀朝雄

草も木も我が大君の國なれば何處か鬼の住家なるべき

大君のみことかしこみ青雲の棚引山を越ゆて來ぬかも

小長谷部笠麿

山はさけ海は涸なん世なりとも君に二心我有らめやも

宗良親王　源實朝

君の爲世の爲何かをしからん捨てかひある命なりせば

楠正成

久方の天つみかどの安かれと祈るは國のみくまりの神

上杉謙信

ものゝふの鎧の袖をかたしきて枕に近きはつかりの聲

平田篤胤

人はよし唐につくとも吾杖は大和嶋根に立んとぞ思ふ

藤堂和泉守

押て見よとくに人の力もて大和嶋根の動くものかは　村田清風

しきしまの大和こゝろを人問はゞ蒙古の使きりし時宗　源實朝

武士の矢並つくろふ籠手の上に霰たばしる那須の篠原　田中綏猷

大君の御旗の下に死にてこそ人と生れしかひは有けれ　小野古道

虎ほゆる國の境ものゝふの守る限りは安けかりけり

○海國歌

是又た神に皇に道の關係深き所の者なるが、多くは近世歌人の詠せる所なり。

や

荒海を四方よめぐらす日の本は神の堅めし御國なり鬼　廣足

船の舳の至らんきはみ海原も君よ仕ふる道はありけり　方耶

ま

皇國の四方のかためと常しへに涙の關守るわたつみの神　菅彦

と

四方の海は天のぬほこの一雫島となりけん名殘なるらし　之正

心

わたつみの汐の八重路も涙風の治まる御代に舟ぞ賑はふ　譽正

あかねさす夕日の名殘去りがたみこがれて見ゆる涙の上哉　知紀

譽重

やまと心

沖つ風吹のさすさびにゆく船は陸より安き道ありげなり　景樹

海原の沖の高くも見ゆる哉幾重つもりし水に有らむ　京麿

天雲のなかぶすかぎり行く船の帆影を波の上に見るかな　丈部造人麿

大君のみことかしこみ磯にふり海原渡る父母をおきて　仙石隆明

よしや身はいづくの浦に沈むとも魂は守らん九重の庭　石上丈夫

大船に眞柁しゞぬき大君の御言畏こみあさりするかも　藤原太后

大船に眞柁しゞぬき、この吾子を唐國へやる祝へ神たち　田邊福麿

濱清み浦うるはしみ神代より千船のはつる大和田の濱　筑前　占部稜威男

いと暑き日傷病兵士の新樹の下にまとゐるせしを見て

やまと心

おけりあふ木かげに心なぐさめん陸が海がの軍語りに　日本海大海戰に敵艦隊全滅の捷報に接しけるとき

遙かなる海路たしなみ航り來てもろく藻屑と沈む敵艦　同トをりに捕虜を見て

恥かしき心ありけに見ゆもせぎ擒となりし敵の益荒男　軍人美談

抑も今日日露戰を交ふるに當り、我軍人の上に於て、忠孝勇烈の美談は、數限りも無きことなるが、其を一々載んには筆

足らず、又其中より拔き取りて擧げんとするよりも、何れを何れと優劣を申す可き暫らく筆を猶豫したるも、然りとて然かく耳にせる所を、聞流しにせんも惜く思はるゝにぞ、今目のあたりに報道を承けたる者の在るを、一事掲載することとはなしつ。然れども前述の旨意の如く、此一事項を以て、多くの中より特別の美談として、拔載したるにはあらず。希ねがはくば之を以て、一般軍人の意氣の在る所の皆斯はかりなるを推想せられんことゝ爲したく、穴賢こ編者が筆を枉て一人に私すと思ふ勿れ。

編者識

時有りて咲く人の心の花ほど、世に有り難き者はあらじ。豐前國田川郡出身、歩兵第十四聯隊第九中隊、豫備陸軍歩兵軍曹、金子荒治となん云へるは、其實安藤吉六の二男にして明治三十二年の夏、養はれて金子氏を嗣ぐ。人と爲り温良にして、克く父母に仕へ、資性斯るが故に人皆是を稱せり。かくて其年の十一月近衛師團に入營し、まだ朞年ならずして、既に上等兵となり、伍長に進みぬ。昨年二月八日、征途に上りしより、毎戰奮鬪、常に人の目を驚かせり。就中關門砲子の殊勳は、常人以上にして、第十二師團中の花とそ匂ひぬる。是れ實に忠勇なる荒治氏が、利き心の致す處とはいへ、又慈母の慈愛の信念、凝りて之に添ひ、其誠は天地鬼神をも感ぜしめにけんかとぞ偲ばる。始め荒治君出征するや、慈母の慈愛心は切りに動きて、雄々しくも、稍々一里もあらん程なる、遠山道を老の身の唯一筋に、霜雪の夜も又た雨風いかに嚴しう吹き荒めばとて、怖氣もなう忍び々々に、獨り產土神社に參籠して、丹心以て其子が奉公の誠を彰はさんことを乞祈りけり。

其驗にやありけん、六月八日の朝まだきに、突然命令は下りぬ。楠田中尉の率ゐる小隊に、關門砲子の山中に、敵將校若干の殘兵と共に、潛み居る由探知しぬるからに、速かに捕獲すべしと何躊躇ふべき、楠田中尉は直ちに部下を率ゐて馳せ向ひぬ。山又山と奥深くわけ入りぬるに、思ひきや敵は創れるが如き、左右の絶壁を要害と恃み、前後に哨兵を置き、いと嚴重に堅め居りぬサスガ强膽不敵の楠田中尉も、翼なき身のいかにともせん樣なく、小隊皆茫然として、徒らに切齒扼腕するのみなりき。時に伍長たる金子荒治氏は、いかにも腹立しげに進み出で、楠田中尉に向ひて、單身進擊せんことを請へり、然れど情いと深き中尉の、いかで容易に許すべき漸やく再三再四に及びて、然らば行け自愛せよとの一言に、此の時金子伍長は、神崎上等兵を招き、共に行きなん、吾先づ行

くからに、吾がハシガキトブの合圖を待ちて進み來よと約し置きつゝ、猿猴どても行き安からぬ斷岸の上より身を躍らしてぞ猛進しける。神崎も劣らトものと、直ちに繼ぎぬ、彼れ敵は既に、鬼神の如き二勇士の元氣にや壓迫せられけん、忽ちにして白旗を揚げ降を乞へり、餘りの事に張りもぬけ、金子、神崎互に顔を見合せ、案外にも脆き奴原なりきとつぶやきつゝ、騎兵大尉ミラトル、中尉カザナエン、及び下士以下五名を、唯二人にて生擒り歸りぬ。眞に人は姿よ依らぬ物にぞありける心の花ぞ難有き、温順至孝の金子は、時に忽ち忠勇義烈の猛士とは變りぬ。實にや忠臣は孝子の門より出づと云ふ、然は云へ天嶮無双の要害を小楯と恃み、寄らば擊んと待ち構へたる眞中に、眞一文字に馳せ下りしに、彈丸も當らず岩石も傷けはせで、なかゝに彼れをして怖ぢ恐れ

むるなどは、實にも々々、人事とは思はれず、彼れ敵は聞き傳へて、日本兵は軍に掛けての神なりと云へりとぞ。日本兵として、強がちに神にはあらぬものを、などて斯くなんいへる、是他なし時に咲くなる日本心の花にして、世に難有き匂ひにぞ有んなる。然して金子荒治氏は、出征十一ヶ月の久しきに亘りて、幾そ度となく、夜晝わかぬ激戰に參加しつ、終始健在にして勤續しつゝあるは、慈愛一片の親心と、忠勇無二の子心を神も隔てず照しますにこそ。然れば第一軍司令官よりの感狀、第九中隊長より養子金子熊太郎氏へ送れる謝狀の趣きにても、其功烈の程は知らるゝことになん。猶荒治氏が實の両親に送りたる書簡有り其中に、其感狀は他日送附の節、祖父德太郎の墓前に供へ、又た養家金子家の靈前にも供へられたく、此の位の事にて國家に盡くす大任は終へず、今

一層奮勵して盡さんの決心なりとの旨を記し、又た其妻やち子に送りし書簡には、爲し得る限り働きて、父母を扶け祖母にも孝に、妹弟をいたはり我が實家の安藤家に對しても、我に代りて父母兄弟に心を付け、我が事は心配するなとの旨を記し有りけるとぞ。猶ほ委しく書かまほしけれども、然のみはとて略しつ。

左に載する所は時局に係れる事なれば、取り集めて編せり、讀む人注意せられよ。

編者識

福岡縣神職督務所へ第六宗像支所ヨリノ報告書

宗像郡社司社掌一同ハ時局切迫ノ際一同會議シテ日露開

戰ノ曉ニ於ケル各自ノ職責上ニ付キ左ノ各項ヲ決議ス

一宗像郡ハ一葦海水ヲ隔テハ韓清ニ對シ出來外寇ノ衝ニ當レルヲ以テ吾人ノ奉仕セル神社ハ皆ナ夷敵鎮護ノ御神德ヲ垂レ玉ハザルナシ遠ク神功ノ三韓征伐ニ於ケル文永弘安ノ元寇ニ於ケル神助天佑ハ史上ニ顯著ナリ吾人神職タル者一意專念悃誠ヲ致シテ神事ニ奉仕シ天佑神助ノ實顯ヲ請禱スベキヲ誓フ

二當職ノ詔勅ヲ下シ給ハヾ直ナニ各自奉仕神社ニ於テ二夜三日間開戰奉告皇軍全勝ノ祈願大祭ヲ奉仕スル事

三戰役中ハ毎朝神前ニ於テ皇軍全捷平和克復ノ祈願ヲ為ス事

四神事奉仕ノ外各般ニ渉リ國民タルノ本分ヲ盡クスニ於テ遺憾ナキヲ期スル事

明治三十七年二月十日宣戰ノ大詔布告セラルヽヤ各神職ハ其奉務神社ニ於テ二夜三日間臨時大祭典ヲ奉仕シ開戰ヲ奉告シ戰捷ヲ祈願ス

爾來毎月一回若クハ三ヶ月毎ニ或ハ戰況ノ發展スル毎ニ臨時祭典ヲ奉仕シテ戰捷奉告皇軍全勝平和克復ノ祈願ヲナス

明治三十七年八月下旬本郡ヨリ出征軍人千貳百餘名ニ對シ慰問狀ヲ呈ス

明治三十八年六月一日帝國一般各神社ニ於テ戰捷祈願ノ臨時大祭奉仕ノ舉アルヤ各神職ハ奉仕神社ニ於テ嚴肅ナル式典ヲ以テ之ヲ奉仕シ撤下ノ神饌ハ各出征軍人ノ家族ニ分配シ此ノ日恰カモ沖ノ嶋附近大海戰大勝利後ノ事ナリシヲ各參拜者ノ感動一方ナラザリキ

縣社宮地嶽神社ニ出征軍隊ノ通過毎ニ九州鐵道福間停車場ニ神職出張シテ神符及撤下神饌ヲ贈呈シ尚ホ日常軍人家族ノ參拜者ニ對シ特別ノ便宜ヲ與ヘタリ

各神職ハ軍人家族ノ慰安恤兵事業ノ援助國債應募ノ勸誘等ニ至ル迄可及的ノ助力ヲナセリ

編者白す、本號材料の各所に要する者の、到來延引若くは其記文の揃はざる者有るが爲めに、發刊延引し、材料の撮合も亦た完全ならざるを遺憾とする所なるが、僅かに其編纂を完くしたるからに、讀者に請ふ、彼れに私を爲し、此れに特に洩らす所有りと思ふ莫らんことを。

本誌寄贈者氏名

福岡縣福岡市神職 眞藤利明 同
同 山內勝太郎 同縣粕屋郡神職
同 平山道 同
同 八尋定彦 同
同 天野恒彦 同
同 天野春次郎 同
同 藤崎良八 同
同 菊地澄鮮 同
同 廣瀨玄銀 同
同縣早良郡神職 盛山武友 同
同 殿上光丸 同
同 殿上三郎 同
同 藤井貢 同
同 池田元胤 同
同 氏里信虎 同
同 松浦準一 同
同 木下美重 同
同 木庭保久 同
同 御田範廣 同
同 田村重次 同
同 木郷豊 同
同 三吉重神 同
同 葦津耕次郎 同縣宗像郡神職
同 緒方稜威雄 同
同 青木輪之輔 同
同 佐々保 同
同 宇和潔直 同
同 西原五六 同
同 篠崎良雄 同
同 木梨千隅 同
同 稻光稔 同
同 內海俊久 同
同 岡曇磯麿 同
同 橘香木實 同
同 宇和直人 同
同 織田圓 同
同 木戸半也 同
同 高向秀實 同
同 豊福民乘 同
同 河野通來 同
同 池浦時吉 同
同 日並次郎 同
同 宗像繁丸 同
同 岡部繁 同
同 壹岐滿鑑 同

同縣浜保郡神職

中津頓丘　同
阿部乙吉　同
桑野弘人　同
越智正人　同

同縣筑賀郡神職

中村保　同
伊東裘生　同
宮本貞潔　同
緒方國鎮　同
中村東彦　同
吉村潔　同
平田足穂　同
大澄主計　同
澤田磯丸　同
野口連　同
中村氏足　同
中村石門　同
入江洋　同
緒方孝太郎　同
豊福常磐　同
古田堺　同
祝部菟道彦　同
波多野玉彦　同
佐野九十九　同
祝部常　同
占部稜威男　同
千々和重種　同
山崎史雄　同
伊高繁躬　同
幡掛連　同

同縣鞍手郡神職

大藤武彦　同
伊高繁壽　同
波多野直興　同
波多野正度　同
伊高林　同
伊藤達道　同
林田頼威　同
岡直起　同
波多野保九　同
波多野直道　同
波多野直隆　同
杉山龍吉　同
永留春景　同
松尾榮　同
千々和來作　同
黒山敏行　同
青山敏雄　同
齋藤武和　同
長屋正彦　同
田部善憲　同
岩熊八郎　同
勝野秋雄　同

伊藤熊雄　同
岩熊正經　同

同縣嘉穂郡神職

小方左馬之助　同
高山通　同
渡邊正臣　同
水田勳　同
齋藤司　同
大村重則　同
栗原六合雄　同
佐伯貢　同
末松啓次郎　同
志井啓次郎　同
三木眞言　同
田部陽福　同
勝野四郎　同
齋藤大助　同
齋藤武揚　同
伊藤勇生　同
白土正種　同
佐伯重文　同
江藤貞正　同
佐伯重賛　同
井上安歴　同
大里吉章　同

同縣朝倉郡神職

青柳貞延　同
大里吉廣　同
高森登　同
西田屯　同
白土饒　同
青柳正秀　同
青柳三枝　同
日高謙也　同
桑野實歴　同
城繁喜　同
西田重敏　同
時枝滿雄　同
青柳武雄　同
秀村健　同
須藤猿松　同
有光讓一郎　同
井上榮　同
松木富榮　同
宮原種茂　同
内藤信　同
上原實信　同
大内田敏香　同
宮永宮丸　同
高安雄　同
古賀六合雄　同
有吉九十九　同
三浦謙吉　同

同縣朝倉郡神職　鹽柄盛江　同　上原實幸　同　小野正雄　同　神坂貞正　同　熊懷輝溥　同　梅崎森吉　同　田中潤次　同縣筑紫郡神職　西高辻信稚　同　與子田敬行　同　梅岡謹撮　同　宮垣勝丸　同　横田昌輝　同縣糸島郡神職　城山正憲　同　藤野清貞　同　大谷延道　同　佐伯昌喜　同　守島　守　同

酒井吉廣　同　鶴崎登　同　上野繁雄　同　不老敏男　同　大長七八　同　豐田實　同　空閑俊郎　同　河上定嗣　同　惟永重和　同　黛秀茂　同　菊地卯之吉　同　重松幸雄　同　宮崎元英　同　御床頼　同　德安正直　同　宮崎廣史　同　菅秀根　同　永松實之　同縣浮羽郡神職　武內義男　同　佐々木武雄　同　安元幸雄

小金丸正種　同　行弘眞　同　大神茂正　同　豐田實　同　空閑俊郎　同　河上定嗣　同　惟永重和　同　黛秀茂　同　菊地卯之吉　同　重松幸雄　同　宮崎元英　同　御床頼　同　德安正直　同　宮崎廣史　同　菅秀根　同　永松實之　同縣浮羽郡神職　武內義男　同　佐々木武雄　同　安元幸雄

熊懷末人　同縣久留米市神職　眞木勇四郎　同　山田義臣　同　小篠靭雄　同　安元澄足　同　宮原速水　同　田中操　同　荒巻榮　同　林田幸之進　同　平田央　同　廣見敏男　同　本山登　同　高田榮　同　吉浦主稅　同　宮崎榮　同　宗崎三郎　同　林幸行　同　石橋淺次郎　同　酒見傳太　同　久富彦丸　同　宮崎巖

土方一雄　同　守山夏樹　同　合原哲太郎　同　鳥飼眞澄　同　神代道將　同　岡政記　同　江崎武雄　同　森反作　同　高田榮　同　本山登　同　吉浦主稅　同　宮崎榮　同　本山淳直　同　石橋淺次郎　同　酒見傳太　同　久富彦丸　同　宮崎巖

熊懷末人　同縣久留米市神職　眞木勇四郎　同　山田義臣　同　小篠靭雄　同　安元澄足　同　宮原速水　同　田中操　同　荒巻榮　同　林田幸之進　同　平田央　同　廣見敏男　同　本山登　同　高田榮　同　吉浦主稅　同　宮崎榮　同　宗崎三郎　同　林幸行　同　石橋淺次郎　同　酒見傳太　同　久富彦丸　同　宮崎巖

土方一雄　同　守山夏樹　同　合原哲太郎　同　鳥飼眞澄　同　神代道將　同　岡政記　同　江崎武雄　同　森反作　同　高田榮　同　本山登　同　吉浦主稅　同　宮崎榮　同　宗崎三郎　同　林幸行　同　石橋淺次郎　同　酒見傳太　同　久富彦丸　同　宮崎巖

同縣三潴郡神職

酒見靖昇　同
宮崎國枝　同
宮崎埴男　同
井上速見　同
松本千守　同
諸橋幸麿　同
廣松光則　同
久富岩根　同
大坪勇　同
井上庫太　同
森山瑞枝　同
北島菊麿　同
同縣八女郡神職
隈清雄　同
隈磐雄　同
近藤繁登　同
高木邦男　同
中原傳吾　同

永田正樹　同
原正雄　同
廣松白銅　同
樋口寅朔　同
宮崎岩雄　同
宮崎龍雄　同
宮崎熊人　同
三原茂　同
森山直記　同
山口榮一　同
大石道雄　同
角大鳥居孝吉　同
鹿野光記　同
岡本宮衛　同
大塚京太郎　同
氷室道別　同
井上辰三郎　同

齋藤晴香
齋藤磐太
宮原九市
坂本重記
岡二郎
宮原貞人
大藪邦太郎
八朋重德
今井勝衛
氷室吉丸
大島哲太郎
大塚靜馬
有積虎之助
榎本誠太
松尾清太
大石酉之助
齋藤德丸

同　武井孝輝
同　吉開茂
同　大藪瑞雄
同縣山門郡神職
鷹尾俊藏　同
石川豊　同
森蔭雄　同
廣田速彦　同
江良甚足　同
滋賀敬之　同
同縣三池郡神職
石橋守直　同
木下重雄　同
岡理臣　同
佐田甚　同
鴨角甚正　同
森田古麻之進　同
山口武雄　同
外河豊次郎　同

橋本駒次郎　同
宮崎氏保　同
山口安太郎　同
齋藤登　同
森清藏　同
河野英夫　同
堤伊三郎　同
石橋守人　同
鴨角榮藏　同
森久豊　同
西山守衛　同
四尻正誼　同
矢野一郎　同縣門司市神職
諏訪正勝　同
松岡三郎　同縣企救郡神職
二宮久人　同
二宮積　同

永井真澄　同
福山房彦　同
西山正邦　同
久保田新一郎　同
松里政光　同
山本光次　同
矢野豊吉　同
矢野巖　同
小笠原鶴次郎　同
矢野孝太郎　同
高山定昭　同
薩山信彦　同
高瀨信臣　同縣小倉市神職
大神貴文　同
川江直種　同
高山定雅　同
福江守重　同

同縣企救郡神職

同　福江守昭
同　平野氏博
同　佐野高嶺
同　石川定紀
同　石崎信
同　高山定義
同　重村瑞江
同　森山正修
同　深田朝守
同　森山正雄
同　石川重書
同　川江正樹
同　峯定種
同　磐梨斌隆
同　廣光正男

同縣田川郡神職

同　高千穗宜麿
同　磐村良馨
同　生實小太郎
同　赤染種嘉
同　鶴我盛貫
同　箕田軌
同　箕田仕
同　箕田清
同　重藤政憲
同　毛利正貫

同縣京都郡神職

同　阿部定香
同　早川功
同　宇都宮正重
同　鶴我盛澄
同　吉竹與吉郎
同　手嶋慶太
同　鶴我靜
同　林盛種
同　大谷多門
同　木森欽太郎
同　柳原包利
同　木森重門
同　重藤久丸
同　鶴我盛嗣
同　碇權吉郎
同　毛利信超
同　伊藤直樹
同　青柳筑摩
同　片山豐盛
同　本鄕雅義
同　本鄕千代彦
同　廣瀨正經
同　谷守親松
同　廣瀨正武
同　熊谷寄一
同　熊谷五郎

同　重村榮孝
同　上村龜太郎
同　高倉信古
同　廣瀨正成
同　山田氏年
同　川寄國彥
同　定村勒負
同　定村政平

同縣筑上郡神職

同　岩田七郎
同　粟田昌德
同　高倉榮
同　高辻安行
同　吉原正照
同　重村正之
同　笠直員
同　神宗則
同　鷹合種敬
同　內山正近
同　定村政太郎
同　鹽田守
同　辻水速
同　高木仲雄
同　神崎政英
同　笠直知
同　湯谷基守
同　清原正彥
同　內尾政孝
同　熊谷房義
同　神勝重
同　生田敬敏
同　宮尾高雄
同　上田幸重
同　角田重正
工藤榮
同　熊谷房重
同　長谷川範二
同　神爲尾
同　上田幸一
同　高橋道分
同　塩田景
同　高橋益塩
同　高橋久司
同　上田辰治
同　佐藤保雄
同　松尾有實
同　高橋左內
同　吉本八郎次

明治三十八年十一月十五日印刷
同　三十八年十一月二十日發行

〔非賣品〕

編輯兼發行者　福岡縣福岡市大工町八十六番地
福岡縣神職督務所
右代表者　勝屋茂彦

印刷者　福岡縣福岡市養巴町四拾貳番地
山田純一郎

印刷所　福岡縣福岡市養巴町四拾貳番地
山田活版所

特46
77

やまと心

国立国会図書館

014687-000-1

特46-77

やまと心

福岡県神職督務所

福岡県神職督務所

M38

ABB-1124